
大日本帝国 航空機戦闘録

沖田五十六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大日本帝国 航空機戦闘録

【Zコード】

Z6583M

【作者名】

沖田五十六

【あらすじ】

太平洋戦争、その戦いの中で数々の戦闘が行われてきました。その中で日本の航空機、空母等が戦つた戦闘にライトを当て、物語として書きました。

注、この物語に出てくるのは、ほとんどが架空の人物です。

落日の零戦（上）

1941年12月8日、ハワイ近海に日本海軍、南雲艦隊がいた。現在、この艦隊の空母「加賀」「蒼龍」「飛龍」「翔鶴」「瑞鶴」の飛行甲板には何十機もの航空機が暖機運転をしてい。この「赤城」もその1隻である。

「佐藤少尉、御武運を祈ります。」

20歳後半あたりの整備員さとうわいんが、零式艦上戦闘機の操縦席に入り出撃準備をしていた男さとうわいん佐藤佐之助に言った。

「ああ。帰つてきたら一緒に酒でも飲もう。」

「もちろんです！必ず戦艦を沈めてください！」

「おいおい、沈めるのは攻撃隊の奴だぞ。俺達は敵機の撃滅だ。」

少し呆れて言った。無理も無い、と佐藤は思った。何せ、今回の攻撃目標は亞米利加合衆国太平洋艦隊の根拠地、ハワイの真珠湾パールハーバーのだから。

「すみません。では。」

整備員が敬礼をした。佐藤も敬礼を返す。そして零戦の操縦席に座りなおした。既に数機の零戦が上がっている。前の零戦が進み始め、その優美な機体が空に飛んでいく。佐藤は、「栄」エンジンの出力を上げていった。今日のエンジンの調子は良好。ブオンという聞きなれた音にも異常は無かつた。佐藤の乗る零戦が進み始めた。

同時刻 オアフ島真珠湾 ヒッカム飛行場

「へい、サム！こんなところで何してるんだ？」

飛行場の片隅にある格納庫のF2Aバッファローを眺めていたサム・マケイン中尉は同階級の男に呼ばれた。

「・・なんか嫌な予感がするんだ。」

「嫌な予感？なんだそれ。そんな事より、聞いたかあの噂聞いたか

？」

「噂？なんの？」

「中国の戦線でたびたび進出しているジャップの戦闘機の噂だ。ジャップの3倍の数の戦闘機で攻撃したら、全機がジャップに落とされたらしいぞ。」

またこの噂か・・とサムは思った。この噂ならこの飛行場中に蔓延している。いい加減呆れるほど聞いてきた。

「その噂、前に聞いた。でもそんなの戦場伝説だろ？ただ単に中国の奴らが弱かつただけだ。あのジャップに強い飛行機なんていない。せいぜい、固定脚の戦闘機が限界だろ。」

「・・・一応、用心しておいたほうがいいぞ。戦場伝説でもな。」

一方、零戦の佐藤はハワイの島影が見えてきた位置に居た。高度3000m、速度時速125キロで飛行中の零戦43機は攻撃隊と離れ、一路真珠湾に向かっていた。360度に敵機の姿は無い。

（奇襲は成功したみたいだな。）

少し安心した佐藤は、近くの零戦に向かって親指を立てた。その零戦のパイロットも佐藤に気付き、親指を立てた。しかし、油断は禁物だ、とも思った

ハワイの上空に入り、零戦は3群に散開してそれぞれ攻撃目標に向かって行つた。佐藤は真珠湾の制空の任務だった。

ヒックカム飛行場の格納庫に居たサムは、遠くから聞こえてくる雷鳴のような音を聞いた。

（なんだ？今日は演習の予定なんて無かつたはずだが・・・）

「なあサム。何か聞こえないか。」

同階級の男が聞いてきた。

「何の音だと思う？まるでエンジン音・・しかも、かなりの量だ。」

「さあ？B-17の編隊でも来るのかな？」

そうではない、とサムは思った。根拠は無かつたが、確実にそれが言えた。

佐藤の零戦は真珠湾が見える距離まで来た。敵機は1機も上つてい
ない。

「よし！奇襲は成功だ！」

「ジャップの戦闘機だ！」

F2Aバッファローに乗り、迎撃に向かっていたサムは20機ほどの戦闘機を発見した。どの機体の翼に毛田の丸が描かっていた。

「ジャップめ！不意打ちか！」

サムは上空にいる敵機を見た。どの機体にも脚が付いていない

だと！？

サムは憎しみと驚愕の混じった感情となつた。

（だが、搭乗員の質はこちらの方が上だ！）

ハツフアローのエンジンをフルスロットルにして、敵編隊に突っ込んでいった。その編隊から数機がこちらに向かっていった。

佐藤は近くの零戦に手で信号を送った。そして、機体を敵機に向けた。2機が後ろについて来た。

(おもしろい！新型機か！？)

このとき、日本側にはバッファローが新鋭戦闘機として知られていました。

そしてバッファローの機銃が火を吹いたと同時に、機銃のレバーを引いた。

仲間の1機が打ち落とされ、サムはますます憎しみを感じた。

（何が何でも打ち落としてやる！）

敵機とすれ違つたあと、機体を反転させた。敵も逆側に反転した。
バ戦バツクファイターが始まった。しかし、速度も旋回半径も向こうの方が上だつた。

2、3回旋回すると、すぐに後ろに付かれた。

（なに！？なんだこの性能は！？ドイツの戦闘機か！？）

このとき、米兵の多くは零戦をドイツ機だと思つていたらしい。

（く！負けてたまるか！）

サムは、失速覚悟で機体を反転、何とか敵機の後ろについた。そして、機銃レバーを引いた。しかし、急に敵機の姿が見えなくなつた。

（なんだ！？急降下したのか！？）

急いで下を覗き込んだ。が、そこにも敵機は見えない。その時、急に後ろから強い殺氣がし、振り返った所にさつきの敵機がいた。

（零戦を舐めるな！）

佐藤は零戦を斜め左上方に宙返りさせ、操縦桿を右側に倒し、フットバーを左側に踏み込んだ。いわゆる、零戦の特技「左捻り込み」である。バツファローの後ろを取つた佐藤は、機銃のレバーを引いた。重々しい発射音がし、曳航弾がバツファローの翼にめり込んだ。

かなりの振動がし、機体が打ち落とされた事が分かるまでに時間が掛かつた。

（早く脱出しないと・・・）

そう思い、風防をあけて飛び降りた。そしてパラシユートを開いた。サムのすぐ隣を零戦が通つていく。そのとき、零戦のパイロットと目が合つた。一瞬の事だったが、相手が敬礼している事が分かつた。そして、零戦が通りすぎた後の光景は、まさに地獄だつた。炎上する戦艦、工場群、青い空には1機たりと星の付いた戦闘機はおらず、黒いシミが何本も立つていた。

「・・・くそ！ちくしょう！俺は、何もできなかつた・・・」

そこには、中国での噂が本当だった事が分かり、泣く事しかできない男が一人いた。

後の世で、不意打ちと非難される真珠湾攻撃を終えた零戦隊が「赤城」他6隻に帰還した。乗組員に歓迎されたパイロットであるが、喜びもあれば悲しみもある。「赤城」から出た零戦が1機やられたのだ。戦艦6隻の戦果はうれしいが、仲間を失う悲しさもあつた。その日、南雲艦隊はハワイから離れ一路日本に向かつた。佐藤は「赤城」の甲板でハワイの方向を向いて敬礼していた。そこに、発進する時に声をかけた整備員が隣に来た。

「・・・戦死した人にですか？」

整備員が聞いた。

「・・・ああ。敵だらうと味方だらうと同じ軍人だ。尊敬してもいいだらう？」

「そうですね。そういえば、発進するときのこと覚えてますか？」

そう言って、右手を上げた。そこには酒の入った1升瓶と2個のコップがあつた。

「覚えてるとも。いただこうか。」

コップを取つて、酒を入れてもらいつつ言った。

「中尉、飲み比べしません？負けたほうは、日本に帰つて陸に上がつたときにお土産として何か買つてくる、という事で。」

「いいぞ。ただし、負けた後に後悔しないようにしろよ。」

2人は笑つた。太平洋戦争が泥沼化し、日本の負けで終わるとは知らずに・・・。

落口の戦（上）（後書き）

「J感想、J意見をお願いします。

落日の零戦（中）

昭和17年6月7日、ミッドウェー環礁沖に「赤城」をはじめ、日本海軍の空母4隻、戦艦2隻、重巡洋艦2隻、その他13隻の小型艦艇からなる、南雲艦隊が現れた。今回の南雲艦隊の目標はミッドウェー並びに、米国の空母戦力の殲滅である。現在、ミッドウェーの飛行場を攻撃し終え、第2波攻撃の為、「赤城」と「加賀」、「蒼龍」「飛龍」の97式艦上攻撃機全機は腹に抱えた魚雷を陸上用爆弾に換装するために、艦内の格納庫に降ろされていた。

「早く魚雷を降ろせ！」

「爆弾はまだか！早くしろ！」

「魚雷の格納を急げ！爆弾が通れん！」

「赤城」の艦尾方向の格納庫から怒号を零戦パイロット佐藤佐之助は艦首側の格納庫の零戦の中で聞いた。

「艦攻隊の方は大変そうだな。」

「ええ。自分も艦攻隊の換装に向かいります。では。」

整備員が敬礼した後、艦尾方向に走つて行つた。

「たく、この状態で攻撃くらつたら終わりだぞ。」

佐藤がそう呟いたとき、スピーカーから声がした。

（巡洋艦「利根」の索敵機が空母を発見！戦闘機は発進せよ！繰り返す・・・）

「言わんこっちゃない！おい！早く上げろ！敵機が来るぞ！」

佐藤の零戦は牽引され、エレベーターによつて甲板に上げられた。そして、所定の発進位置についた。

「エナー・シャまわせ！」

レシプロ機、特に昔の飛行機はエナー・シャと呼ばれる自動管制装置（つまりはスタートーター）を回さないとエンジンは始動しなかつた。始動はまず、手でプロペラを軽く回し、キャブレーターにガスを吸わせる。次に、カウフラップを開き、エナー・シャにクラシクを突つ

込んで回す。エナーシャが勢いよく回り始めたら、作業員を下げ、操縦席でエナーシャとプロペラの軸を直結。するとプロペラが回り始める。発動機のスイッチをオンにするとエンジン始動できる。

「前離れ！」

佐藤はそう叫んで発動機のスイッチをいれた。すると、プロペラが回り始めた。このまま発進するとエンジンストップしてしまう為、10分～20分ほど暖気運転する。しかし、時が時である。

「5分暖気運転したら発進する！艦橋の人に伝えてくれ！」

他の零戦も発進位置についた。

5分後、艦橋で発進指示が出た。佐藤は、ブレーキをかけて、エンジンをフルスロットルにした。

「エンジン出力最大、フラップを出して、と。発進準備完了。」

佐藤はそう言って、ブレーキを解除した。零戦が勢いよく前に進み始めた。そして、甲板上を速度を上げながら進み、飛び立つて行った。

「敵空母は何処にいる！」

アメリカの艦上戦闘機F4Fワイルドキャットの操縦席で真珠湾で大敗を喫したサムは苛立っていた。彼は今、空母「ヨークタウン」に所属しており、TBDテバステイター雷撃隊の護衛に当たっている。

「早くしないと燃料が切れる！まだ見つからないのか！」

（ミッドウェーの報告だとここだそうですが、姿が見られません。）

無線から雑音が混じつた声がした。

（あー雲の下に敵発見！ジークらしき戦闘機が多数！）

「よつしゃー真珠湾の仇討ちだー雷撃隊、攻撃は任せたぞー！」

佐藤の隣を飛んでいた零戦のパイロットが上に指を指した。佐藤はそれに気付き、上を見上げた。すると小さな黒点が40個あった。佐藤と零戦数機はその黒点に接近して行つた。接近し、翼部に描か

れた絵が見えてきた。日の丸、では無く全機が青星が描かれていた。アメリカ海軍の模様である。

（敵機、しかも雷撃機が多数か。上にいる無骨の戦闘機は・・・F4Fか！）

F4Fは太平洋戦争初期のアメリカ海軍主力艦上戦闘機である。が、零戦に対しては無力だった。

（面白い。零戦が強いか向こうが強いか、試してやろう！）

そう思い、エンジンをフルスロットルにして敵機群に突っ込んでいき、雷撃機に機銃を一連した。

（うわアアアアア！）

無線から断末魔の叫びが聞こえた。

（雷撃機13番、15番、5番、3番機がやられました！戦闘機1番機も！）

（敵機、上空に抜けました！反転、攻撃してきます！）

「落ち着け！戦闘機2番機から7番機まで、俺について来い！その他は雷撃隊の防御だ！」

サムはF4Fを6機を率いて零戦の迎撃に向かつた。

（今ので5機撃墜か。）

そう思い、敵の方を向いた。F4Fが7機、こちらに向かつて来ていた。佐藤は、機体を反転、F4Fの1群に突っ込んでいき、機銃のレバーを引いた。F4Fが2機、火を吹いて落ちていった。2機のF4Fが零戦を追おうとして旋回した。佐藤は、F4Fとは逆方向に旋回、真珠湾と同じ空戦となろうとしていた。

「その手に乗るか！3番機、4番機はジークの上から攻撃しろ！他のジークは！？」

（2機が雷撃隊へ、4機はこちらと交戦中・・・うわアア！）

無線からまた断末魔の叫びが聞こえ、また一人戦友を失った。

「くそ！ 戦闘機隊に連絡！ 全機撤退しろ！ ジークには勝てん！ ほかの F 4 F が撤退していくなか、サムの F 4 F だけは撤退せずに 1 機の零戦と戦闘していた。

（こいつ、真珠湾で戦つたやつだな。）

1 機だけ残った F 4 F と戦いながらそう思った。他の零戦は、全機が雷撃隊の攻撃に向かつたためここにいるのは佐藤の零戦のみである。

（雪辱戦というやつか。だが負ける気はしない！）

零戦と F 4 F は巴戦ドッグファイトに入つた。そして 2、3 回旋回して零戦が F 4 F の後ろをとつた。

（やはり零戦に旋回で勝てる奴はいないか。）

そう思った。そして機銃のレバーを引いた。

F 4 F に震動が走り、撃たれた事を知らせた。が一向に落ちる気配が無い。

（F 4 F は防弾性能が高い！ そう簡単に落とされはしない！）
サムがそう思い、エンジン出力をフルにして零戦から離れ、旋回して零戦を正面に捕らえた。

（どうせやられるなら、お前も道ずれだ！）

そして機銃を発射した。

零戦は被弾し、煙を出しながら降下していった。

（くそ、まさか奴に撃たれるとは。）

佐藤はコックピット内で思った。コックピットには 1 弾も被弾していない。が、機体に数十発も被弾していて、エンジンがいつ止まつてもおかしくなかつた。

（とりあえず、艦隊の近くまで行かないと……）
そう思い直進していくが、向かう先に 3 つの黒い煙が上がつていた。

（ジークを落としたのはよかつたが、この状態じゃ帰還は難しいな・・・）

サムはそう思った。すると、近くに他のF4Fが近づいてきた。

（おい、大丈夫か！？）

無線から懐かしい声がきこえた。その声の主は、真珠湾で零戦の噂話をした同階級の男だった。

「ああ、なんとか。でも帰還は難しい。すまないが、帰つたら水上機を回すよう、つたえてくれ。」

（了解した。何とか持ちこたえる。）

無線がそう言つた後、F4Fは離れていった。

「くそ！俺が離れている時に・・・！」

佐藤が見た光景は、ついさっきまで連合艦隊の主力だった「赤城」「加賀」「蒼龍」が炎上しているところだった。佐藤の零戦は艦隊

上空でエンジン停止、着水して水没していった。

「落ち込まないでください。まだ負けたわけじゃないんですから。」

「赤城」で一緒だった整備員が言つた。

「だが・・・」

「確かに戦死した人も多いです。が、操縦員の生存者は比較的多いかつたんです。まだ日本には戦う力があるんです。」

「・・・そうだな。」

暗い顔をしたまま、言つた。

後の世にミッドウェー海戦と呼ばれる海戦で、日本の戦況は悪化した。主力空母4隻が撃沈、パイロット121名が戦死し、うち25名が零戦パイロットだった。

落口の戦（中）（後書き）

「J感想、J意見をお願いします。

落日の零戦（下）

1945年4月、沖縄にて太平洋戦争唯一の本土決戦が行われていた。このとき、日本から多数の戦闘機、爆撃機（しんぶうちくべつこうげきたい）が爆弾を抱えて、敵艦に突っ込んでいった。いわゆる神風特別攻撃隊（しんぷうとくべつこうげきたい）である。しかし、その特攻作戦をせずに戦果を上げてきた部隊がいた。

芙蓉部隊である。その部隊に、真珠湾攻撃の時から生き抜いてきた男がいた。佐藤佐之助である。

4月27日、既に世界最強の戦艦「大和」は沈没。事実上、連合艦隊は壊滅した。しかし、まだ日本は戦闘機による攻撃を加えていた。芙蓉部隊もその一つである。この日、「大和」が出撃した「菊水1号作戦」に続いて「菊水4号作戦」が実施されていた。

芙蓉部隊の第1波攻撃は午後7時34分、「彗星」爆撃機が出撃し飛行場攻撃を行った。この攻撃で250キロ爆弾を飛行場に投下した。そして今、第2波攻撃が行われようとしていた。

飛行場の発進位置についた零式艦上戦闘機52型には、佐藤が乗っている。後続して、位置についた零戦はたつたの1機だった。

「2番機、調子はどうだ。」

（良好です。いつでも行けます。）

「そうか、あと2分で出撃する。発進準備をしておけ。」

（了解。）

無線からの報告が終わって、操縦席に沈黙が走った。

（「Jの数で戦場に突入するなら、俺の人生は今日で終わりだな・・・。」）

佐藤はそう思った。F6Fがうようよいいる所に、たつた2機で突つ込み艦船に銃撃をくわえるなど、士に等しい。

「2番機、聞こえているか。」

（はい、何でしょう？）

「俺がやられたら、すぐ撤退しろ。わかったな？」
(・・・そういうことが無い事を願いましょう。)

そういうしている内に2分たつた。佐藤は、エンジンをフルにして発進した。後続の零戦も続く。

生きて帰れるか分からない戦闘が開始した。

約30分後

F6Fの編隊の戦闘にサムがいた。

「エンタープライス」から「エセックス」に所属が変わり、さらに沖縄の航空隊の隊長になっていた。

(レーダーに反応！ 戦闘機らしき機影が2機です。)

無線から報告が入った。サムはすぐに場所を聞いた。

(現在位置から北東方向20キロ先です。速度は300キロ。速度からしてゼロでしょう。)

「わかつた。戦闘機隊に連絡。2番機と3番機は俺について来い。ゼロを迎撃する。」

(了解。)

「相手はゼロでも油断はするな。油断していたら、すぐ戦死につながる。分かつたな。」

(分かつてます。)

「よし！ いくぞ！」

3機のF6Fが編隊から離れ、全速力で零戦に向かつて行った。

10分後、上空1000メートルの所にいた零戦の佐藤が上空のF6Fの編隊を発見した。距離は3000m。

「2番機！ F6Fが3機だ！ 攻撃がくるぞ！」

(え！？)

無線から声が聞こえた直後、F6Fによる攻撃が来た。佐藤の零戦に4発が、2番機には1発が直撃した。

「2番機、無事か！？」

（大丈夫です！そちらは？）

「ああ、燃料タンクに被弾したみたいだ。帰還できそうに無い。」

（そんな・・・諦めないでください！）

「おい。発進する前に言つたはずだ。撤退して次の戦闘に備える。」

分かつたな。」

佐藤は無線の電源を切つた。

（ゼロが1機撤退していきます。）

「2番と3番は追撃に迎え！」

（了か・・うわあああ！）

無線から叫び声が聞こえた。

（3番機が落とされました！ゼロが攻撃してきました！振り切れません！）

「落ち着け！2番機はすぐに離脱、飛行場に着陸しろ！」

（了解！）

F6Fが1機撤退して行き、残つたのは佐藤の零戦とサムのF6Fだけになつた。

（真珠湾の奴の癖にそつくり・・いや、本人かミッドウェーでの借り、返させて貰うぞ！）

サムはエンジンのスロットルを手に取つた

（ミッドウェーの奴だな！決着を付けようじゃないか！）

佐藤も続いてエンジンスロットルを手に取つた。

そして2人は同時にエンジンス出力を全開にした。

まず先制攻撃をしたのは、F6Fの方だつた。零戦の背後に回り、機銃を発射した。が、零戦はそれをかわし、海面すれすれまで降下した。こうした方が弾は当たりにくいかからだ。

F6Fもそれについて行き、零戦の斜め上方の後ろについた。それは、佐藤が理想としていた状態だった。

（よし、まさかこんな時に使うとは思わなかつたが・・・。）
そう思いながら、佐藤は操縦桿を強く握り締めた。そして、機体を斜め上方に滑らせ、背面飛行に入る前に操縦桿を右に倒し、フットバーを左側に踏んだ。

零戦の必殺技、「左捻りこみ」である。

（この高度での技を使つただと！？）

サムは驚いていた。左捻りこみは零戦自体を失速させる技である。普通は水面ギリギリで使う技ではない。

（まずい、撃墜される！）

サムはそう思つて、操縦桿を引いて上昇した。零戦も続いて上昇する。そして、すぐ隣を曳光弾が掠めた。続いて振動がして被弾した事を伝えた。が、F6FもF4Fと同様に装甲が厚いため、落ちなかつた。しかし、甚大的なダメージを負つた。

F6Fが煙を出しながら上昇していった。零戦も続いて上昇していく。が、その時F6Fがスピードを上げて行き、反転して突っ込んできた。今、戦争初期からの因縁の戦いが終わろうとしていた。

零戦の機銃とF6Fの機銃が同時に火を吹き、両機の機体が削れていいく。零戦は垂直尾翼が吹き飛び、F6Fは主翼が折れた。両機とも、きりもり状態になり海面に落ちていった。どちらの風防も真っ赤になりパイロットが出てくる気配は無かつた。

その後、1945年8月15日、戦争は終わつた。2人が戦死してから約4カ月後の事である。

日本の敗退で終わつたこの戦争は太平洋戦争と呼ばれ、日本を非難

する国も多かつた。

しかし、あの戦争のおかげで独立できた国もある。東南アジアの国々がそうである。

しかし、非難されようがそれまいが、あの戦争のことは忘れてはいけない。

永遠に・・・・・

落日の零戦（下）（後書き）

「」意見、「」感想をお願いします。

また、リクエストも募集中です。航空機名か空母名と戦闘の名称を送ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6583m/>

大日本帝国 航空機戦闘録

2010年10月9日15時12分発行